

岐阜県内時代別主要城館跡分布図について

近藤大典

About the historical distribution map of major castle ruins in Gifu Prefecture

KONDOU Daisuke

要旨 『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第1集から第4集にまとめられた城館歴、概要をもとに、また個別の城館跡の発掘調査報告書等を参考にして、岐阜県内の時代別主要城館跡分布図を作成した。

はじめに

当館では、令和5年(2023)4月22日(土)から6月18日(日)までの会期で、岐阜県図書館2階特別展示室Ⅱにおいて、令和5年度博物館・図書館連携企画展「岐阜の城館探訪Ⅱ ー最近の調査成果からみた岐阜の戦国ー」を開催した。

展示では、2章に分けて岐阜の城館跡について紹介を行った。「第1章 最前線 岐阜の城館調査」では、国史跡指定を目指して調査・研究が進む松倉城跡(高山市)、大桑城跡(山県市)、姉小路氏城館跡(飛騨市)、篠脇城跡(郡上市)を取り上げ、出土品や赤色立体地図などの調査成果を各自治体の御協力のもと紹介した。「第2章 岐阜の戦国と城館」では、岐阜県内の時代別主要城館跡分布図をパネル化して掲示した。

幸いなことに昨今のお城ブームの影響もあってか、展示は多くの方に観覧いただくことができた。一方、この連携企画展では図録やパンフレットを作成していなかったため、会場やアンケートにおいて、その点を残念とする声が聞かれた。なかでも第2章の分布図パネルについて、印刷物として手元に欲しいという声をいただくことができた。

そこで今回この場を借りて、パネルとして掲示した時代別の岐阜県内主要城館跡分布図を印刷物用に修正し、改めて提示したいと思う。また、会場では、分布図に添えて、それぞれに簡単な解説パネルを付した。今回、分布図下に語尾を改めたうえで、その解説文も掲載した。なお、展示時のパネルの誤脱についても修正を行った。

岐阜県内の城館跡を考える際の一助になればと思う。

岐阜県内主要城館跡分布図

岐阜県中世城館跡総合調査によって、県内では809ヶ所の城館跡と189ヶ所の城館跡参考地が明らかとなった。その調査成果である『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』

(以下、『報告書』と略称する。)では、城館跡の分布、概要、関連地名、文献史料、論考、絵図や空中写真・現況写真などがまとめられている。すべての城館跡の基礎データが一覧表となっているが、主要な城館跡はそれに加えて図面、城館歴、遺構の概要などが簡潔ではあるが的確にまとめられている。

そこで『報告書』掲載の城館歴及び概要をもとに、発掘調査が行われた城館跡はその成果も加味して、築城、廃城、使用状況等を整理した。その数は、356ヶ所となった。本図はそれをもとに作成したものである。個別の城館跡については、今後の発掘調査等の進展によって理解が変わることはあると思うが、大まかな時期別の分布の傾向は本図によってみることはできるのではないだろうか。

さて、展示では下記の5時期に分けた分布図をパネル化して提示した。

- 1 室町時代 応仁の乱頃まで。
- 2 戦国時代 織田信長が美濃を制した永禄10年(1567)以前の戦国時代。
- 3 織田期 織田信長が美濃を制したのち、天正10年(1582)の本能寺の変まで。
- 4 豊臣期 本能寺の変後、慶長5年(1600)の関ヶ原合戦まで。
- 5 江戸時代 慶長5年以降、江戸時代全体を網羅。時期ごとに細分する必要があったが展示パネルでは一括した。

本稿では、1から4の分布図を掲載する。5については、今回、時期ごとの細分をしておらず、今後の課題として割愛する。

なお、現在の岐阜県は一般的に南部を美濃国、北部を飛騨国と単純に示すことが多いが、江戸時代以前の周辺の国々との国境がそのまま県域となっているわけではない。本稿でいう「岐阜」とは現在の岐阜県域を示している。

謝辞

令和5年時点での県内の城館跡数について、御教示いただいた小野木学氏に深く感謝申し上げます。

く、サンライズ出版

山県市教育委員会, (2022), 令和4年度大桑城跡発掘調査
現地説明会資料

注

1 県内の城館跡数は、総合調査後も新発見により増加している。また、平成17年に岐阜県に合併した旧長野県山口村孫村域にも4城が知られている。

参考文献

- 可児市, (2021), 美濃金山城跡主郭発掘調査報告書
可児市教育委員会, (2013), 金山城跡発掘調査報告書
岐阜県教育委員会, (2002), 岐阜県中世城館跡総合調査報告書第1集 (西濃地区・本巣郡)
岐阜県教育委員会, (2003), 岐阜県中世城館跡総合調査報告書第2集 (岐阜地区・美濃地区)
岐阜県教育委員会, (2004), 岐阜県中世城館跡総合調査報告書第3集 (可茂地区・東濃地区)
岐阜県教育委員会, (2005), 岐阜県中世城館跡総合調査報告書第4集 (飛驒地区 補遺)
岐阜県文化財保護センター, (2011), 三枝城跡
岐阜市教育委員会・公財岐阜市教育文化振興事業団,
(2018), 黒野城跡, 平成28年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書
岐阜市, (2021), 史跡岐阜城跡総合調査報告書
岐阜市教育委員会, (2009), 岐阜城跡 織田信長居館伝承地の確認調査および岐阜城跡の遺構分布調査
岐阜市教育委員会, (2003), 史跡加納城跡
下呂市教育委員会, (2014), 桜洞城跡発掘調査報告書
下呂市教育委員会, (2014), 萩原諏訪城跡発掘調査報告書
財団法人岐阜県文化財保護センター, (2006), 上惠土城跡・浦畑遺跡
高山市教育委員会, (2023), 松倉城跡発掘調査現地説明会資料
中井均・内堀信雄 編, (2019), 東海の名城を歩く 岐阜編, 吉川弘文館
飛驒市教育委員会, (2010), 増島城跡
飛驒市教育委員会, (2022), 姉小路氏城館跡総括報告書
瑞浪市教育委員会, (2005), 小里城山城跡一御殿場跡発掘調査報告書
三宅唯美・中井均 編, (2010), 岐阜の山城ベスト50を歩



1 室町時代から応仁の乱頃の岐阜の様子と城館跡の分布

応仁元年(1467), 足利氏の将軍職や管領家の家督争いなどを契機として京都を舞台におこった応仁の乱は、やがて全国に影響を及ぼし、各地で争いがおこる戦国時代の始まりとなった。

応仁の乱より前の室町時代, 美濃は守護土岐氏が守護代斎藤氏など有力な武将の助けを得て支配を続けていた。一方, 飛騨は古川盆地を拠点とする国司姉小路氏や守護京極氏が勢力を持っていた。

【応仁の乱頃の様子】

美濃では, 守護土岐成頼が西軍に属して京都で戦い, 守護代斎藤氏の有力者, 斎藤妙椿が国元で軍備を整え京都の争いの結果を左右すると言われるまで力を増していた。ちなみに応仁2年には東氏の篠脇城(現郡上市)が一時, 妙椿によって奪われている。

飛騨では, 一族内の内紛でゆれる姉小路氏, 京極氏が力を弱め, 一方で桜洞城(現下呂市)の三木氏や高原諏訪城(現飛騨市)の江馬氏が力をつけていた。



2 戦国時代の岐阜の様子と城館跡の分布

織田信長が美濃を攻略した頃には一般にはまだ戦国時代とされているが、ここではその前までを一区切りとして岐阜の様子をみる。

各地で身を守るため、支配を広げるためと様々な勢力が争った戦国時代。岐阜においても室町時代に比較すると築城や合戦、城主などに関する記録等が残る城館が激増する。

【天文16年(1547)頃の様子】

戦国時代を象徴するキーワードの一つ「下剋上」、その体現者として有名なのが斎藤道三である。美濃の戦国で最も大きな動きは、道三の台頭であると言える。

道三が活躍した天文16年頃、美濃では守護土岐頼芸が大桑城(現山県市)に拠り、稲葉山城(現岐阜市)の道三に対していた。飛騨では、古川盆地にまで勢力を伸ばし姉小路氏の名跡を継いだ三木(姉小路)良頼と江馬氏が対立していた。



3 織田信長の時代の岐阜の城館

永禄3年(1560)桶狭間で今川義元を討ち尾張をあらかた平定した織田信長は、翌年から美濃への侵攻を開始する。まず西濃に攻め入るが斎藤義龍に阻まれ撤退する。永禄6年、信長は小牧山城(現愛知県小牧市)に移り、8年に中濃から可児方面を手中に収める。その後、東濃で独自の勢力を保つ遠山氏と結び、西濃の有力武将を従えと永禄10年(1567)稲葉山城(現岐阜市)を落として斎藤龍興を追い、美濃を攻略する。稲葉山城は岐阜城と名を変える。

【織田信長の時代の岐阜の様子】

信長の居城の岐阜城を中心に、西濃から中濃、東濃の西部に信長の家臣や信長に従った武将の城が分布している。東濃東部(現瑞浪市・恵那市・中津川市)は武田氏との争いの最前線のため、前後の時代に比べ多くの城が知られている。飛驒では信長と結んだ姉小路氏が上杉氏に従う江馬氏を押しつつあった。



4 豊臣政権下の岐阜の城館

天正10年(1582)の本能寺の変後、豊臣秀吉の政権が安定するまで、岐阜は再び激動の時代を迎える。美濃の中心岐阜城は一旦、織田信孝が支配するが天正11年に秀吉によって追われ、池田恒興の長男元助が入る。しかし、翌12年小牧長久手の戦いで元助が戦死すると弟の輝政が入るなど、目まぐるしく城主が変わる。東濃では金山城(現可児市)の森氏が遠山氏や小里氏を追放し支配を広げる。飛騨は、天正10年に姉小路(三木)自綱が江馬輝盛を討って平定している。しかし、同13年秀吉の命を受けた金森長近に滅ぼされ、後、長近が飛騨を支配する。

【豊臣政権下の城館分布】

新たに築かれた黒野城(現岐阜市)など一部を除いて記録が残る城館はその数を減らす。しかし、秀吉死後の関ヶ原合戦では、関ヶ原周辺で城の整備や陣城の構築など再び知られる数が増えている。